

ひょう害を知り、選択肢を持つ

数万台規模の修理車両を生むひょう害

2024年4月16日、兵庫県を中心に大規模ひょう害が発生した。日本損害保険協会の調査によると、保険金の総支払い額は564億3,941万8千円。そ

のうち、車両保険だけでも事故受付件数は8万1,021件、支払い保険金は314億2,416万6千円と甚大だった。

車両の被害に関しては、実際には全損扱いとなるものもあるため、事故受付した8万台強すべてが修理対応となったわけではないだろう。残念ながら

鈑金塗装工場で実際に修理された被災車両の台数に触れたデータは存在しない。しかし保険を利用しなかった車両もあることを鑑みて、修理車両は少なくとも数万台規模になったことが予想できる。とはいえ、一度にこれだけの規模の台数を工場は受け付けられない。

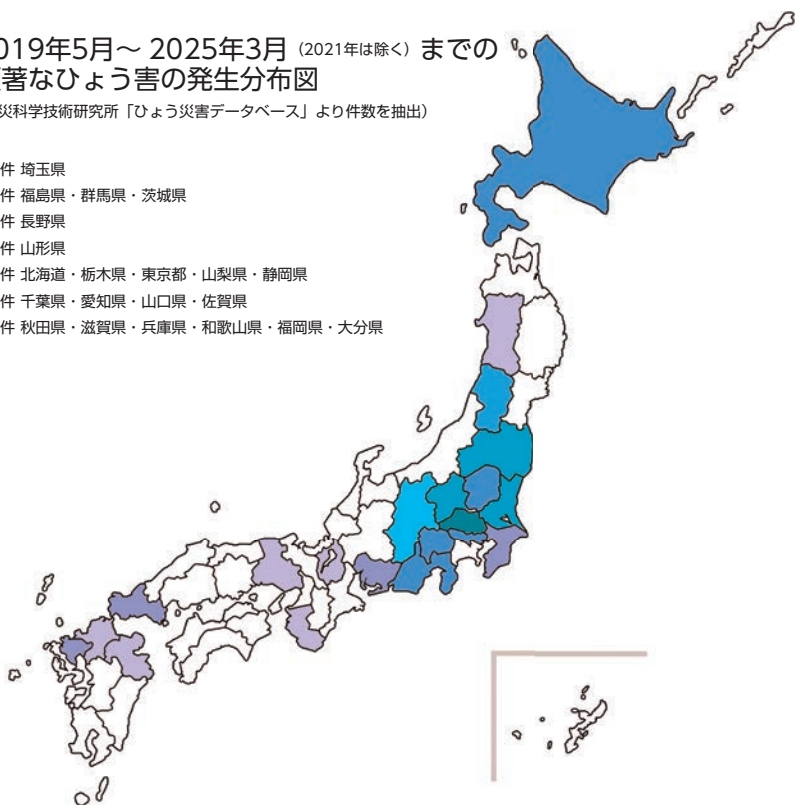
大規模なひょう害が起きた際、県内の工場で処理できず、ディーラーを通じて県外に依頼されるケースも珍しくないと聞く。さらにカーメーカーの交換用部品の製造が追いつかない場合もあり、大規模ひょう害のたびに数年の修理待ちが発生することもある。

そもそも、工場にとってもひょう害車両は受け入れにくい要素がある。ひょうは一度にパネル全体に数十個の凹み傷を生むため、修理を敬遠し、パネル交換を選択するケースが多い。しかし交換の場合は先に挙げたように部品供給が追いつかなければ、そもそも作業に取り掛かれない。ルーフパネル交換の際には脱着作業に広いスペースが必要だ。通常の業務と並行しながら、車両置き場も確保しなければならない。しかも、元請け先のディーラーや保険

2019年5月～2025年3月（2021年は除く）までの顕著なひょう害の発生分布図

（防災科学技術研究所「ひょう災害データベース」より件数を抽出）

- 9件 埼玉県
- 8件 福島県・群馬県・茨城県
- 7件 長野県
- 5件 山形県
- 3件 北海道・栃木県・東京都・山梨県・静岡県
- 2件 千葉県・愛知県・山口県・佐賀県
- 1件 秋田県・滋賀県・兵庫県・和歌山県・福岡県・大分県



ディーラー・工場でのひょう害車両対応実例

損保会社と独自ルールを策定し、滞留期間を短く対応 Honda Gloss群馬 前橋センター (群馬県北群馬郡)

ホンダカーズ群馬の内製工場であるHonda Gloss群馬 前橋センターでは、同社入庫車両の集約及び修理センターとして稼働している。

2025年7月現在、ひょう害修理は月平均10台ほどとなっている。2022年から群馬県を中心に定期的に降り出したひょうにより、入庫は後を絶たない。ここ4年ほどのひょう害の処理台数は約250台。辺見栄二センター長兼ブロック長は、「損傷が軽度な場合も多く、点検入庫でひょう害に遭っていたことを知るユーザーも多い」。

現在もひょう害による修理待ち車両は300台を超えるという。同社では2022年のひょう害があった際に損保会社各社と修理方法の意思統一を行った。損保各社によって若干の違いはあるが、ボルト・オン・パネルと溶接パネルの場合でそれぞれ補修か交換の判断をし、迅速な修理を図っている。凹みの状態は工場内で暗い部屋を設け、専用のライトを使い行う。「日中では正確な凹みが確認できないことが多いが、担当者は塗装班出身なので小さな凹みも見落とさない」。

補修時はデントリペア技術者を招き対応する。現在

は2～3人で対応しているが、入庫のピーク時はデントリペア企業2社・8人で対応し、月30台ほど処理したという。損傷度合いによって差はあるが、修理期間は2週間～1ヵ月半ほど。「意思統一を行ったことで補修か交換かの判断が付きやすく、修理期間と納車時期が短縮された」と辺見センター長は話す。今後も群馬県ではひょう害は予想されることから、万全の準備を整えて対応していく。



辺見 栄二 センター長
兼ブロック長



工場外観



ひょう害車両の一部

外注に出さず自社で対応

ヤマモトガレージ (兵庫県加古川市)

钣金塗装や車検、一般整備などを展開する同社。2024年4月16日に加古川市内で起きたひょう害では、その後数日間、営業時間外でもフロントの電話が鳴り止まず対応に追われた。入庫待ちのひょう害車はようやく残り10台（取材時）となり終わりが見えてきたと言う。

钣金塗装処理台数は月に約70台で推移するが、ひょう害車の入庫時は40～50台に減らしてひょう害修理に注力した。ひょう害車の入庫を4～5台／月にコントロールし、交換パーツやガラスなどの部品待ちの期間を考慮して1台当たり1～2ヵ月は工数として見ている。外注には出さず、自社の入庫状況を顧客にしっかりと説明した上で待ってもらえる車のみを受け付ける。

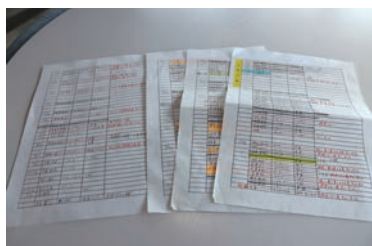
ひょう害車補修では、凹み個所が数百を超えた場合の凹み確認や脚立を用いた塗装など、通常の損傷車補修の工程に加えて必要な作業が増える。その増加作業分や塗装費用を見積りに適切に計上することで、「一般修理の入庫を減らしても充分利益を確保できる」。項目は作業順序に沿ってきれいに配置し、アジャス

ターが見やすい見積書を心掛けている。

また顧客へ修理か交換を提案する際に、一つの目安としているのがプレスラインがどれだけ生きているか。たとえばルーフパネルの場合、ラインがおおよそ残っていれば修理を提案するケースも多いが、「損傷が激しい場合は、交換と修理それぞれのメリット・デメリットをていねいに説明し、修理だけでなく交換を提案することも時には必要」。



山本 渉 社長



ひょう害車入庫対応時の受付表のごく一部



現在修理中のひょう害車